

学会名 日本看護研究学会 第49回学術集会  
(2023年8月19日～20日)

研究テーマ 回復期リハビリテーション病棟入院患者へのアドバンス・ケア・プランニングの  
話題提供による関心や思いの変化

病院名 医療法人社団健育会 石巻健育会病院

演者 ○遠藤千恵(看護師)  
庄司正枝(看護師)武山裕美子(看護師)菊池美咲(看護師)

## 概要

### 【研究背景】

アドバンス・ケア・プランニング（以下ACP）は「人生会議」とも称され、患者の意思を尊重するための重要なアプローチとして注目されている。近年、終末期患者だけでなく、回復期リハビリテーション病棟（以下回復期リハ病棟）の入院患者にも進める重要性が述べられている。

### 【研究目的】

回復期リハ病棟入院患者がACPに対しどのような関心や思いを抱いているのか、ACPの話題提供により関心や思いがどのように変化するか調査する。

### 【研究方法】

- 研究デザイン: 介入研究
- 研究期間: 2022年4月～9月
- 研究対象者: A病院回復期リハ病棟入院患者（認知症高齢者日常生活自立度3以上の患者を除く）
- 調査内容: 基本属性（年齢、性別等）、聞き取り調査10項目（ACPという言葉は知っているか、もしものことは考えているか等、VASによるACPに対する関心）
- 介入方法: 入院1ヵ月後に研究者が厚労省のリーフレットを用いてACPの話題提供、その2週間後に病棟看護師が補足説明を実施。介入前後で聞き取り調査を実施
- データ分析方法  
基本属性は単純集計、介入前後の比較は対応のあるt検定他を使用
- 倫理的配慮: A病院倫理委員会にて審査を受け承認を得た。利益相反はない。

### 【結果】

対象患者は21名（有効回答率95.5%）、男女比ほぼ半数、脳血管疾患61.9%、平均年齢69.8歳であった。介入前はACPという言葉は95.2%の患者が知らなかった。もしものことを考えている患者は13人（61.9%）、大切な人へ伝えている人は10人（47.6%）いた。話し合う際の医療スタッフの存在や、入院中にACPを話題にすることに対して肯定的な回答をした患者は多かった。VASを用いたACPへの関心は介入前34.3から介入後49.6と有意に高くなった。

### 【考察】

回復期リハ病棟入院患者はACPという言葉について認識はなかったが、話題提供により関心は高まった。ACPは3段階に分類され、第2ステージは何らかの病気や障害を持ちながら生きる人へのACPであると言われている。回復期の患者は発症によりその後の生活が変化する時期であり、自分の意思を表明できる段階でもある。この段階でACPの話題提供を行うことが「もしものこと」を考えるきっかけになると期待できる。また、入院生活に慣れる入院1ヵ月後に介入したことや1回に留めず再度話題提供を行ったことは患者の記憶に残り効果的であった。

### 【結論】

- 患者はもしものことを考えている・考えていないに関わらず、ACPの話題に肯定的な思いを抱いていた。
- 入院から1ヵ月後に看護師による2回の話題提供を行ったことで、患者のACPへの関心は高まった。